



1



2



3



4



5

ソンエリュミエール—物質・移動・時間、そして叡智

第2章：そして叡智 2012.9.15-2013.3.17

自然の力、科学の限界を象徴する、3.11という惨事を通して露呈されたのは、様々な次元で蔓延する権力欲、支配欲やエゴイズムという現代社会の膿みではないだろうか。第1章に続き、本展では、危機と混沌に敏感に反応し、そして向き合う14組のアーティストと1プロジェクトとともに、「今」を生きる人間の叡智を探った。

画家として最高位に着きながら、制度や人間社会の虚栄と欺瞞、欲、悪を独自のスタイルで暴いたフランチェスコ・デ・ゴヤの貫いた姿勢は、本展において重要な鍵となった。時間、地域文化の隔たりを越えて変わらぬ強さと鋭さで迫るゴヤの作品から、「[ロス・カブリョス] 4番 乳母つ子」と《[ロス・カブリョス]62番 一体、誰が信じるだろうか》の借用がなかった。これらは、Chim ↑ Pom、ジェイク&ディノス・チャップマンの作品と同室に展示され、欲が支配する

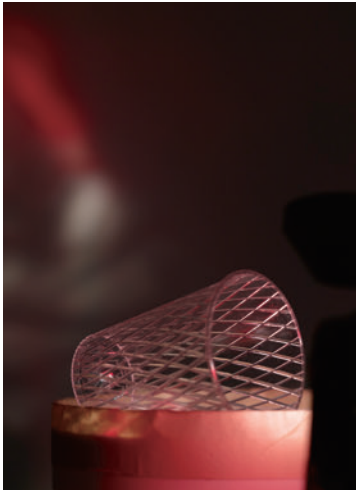
社会の間、人間の本質を見抜く創造行為の共鳴が時を越えて実現された。

奈良美智の《Fountain of Life》では、カップという器に山積みとなった頭部の腫から涙の流れる様が、枠内に閉じ込められた者の悲しみ、不安、怒りを強調させた。ラファエル・ロサノ＝ヘルメルの《パルス・ルーム》は、常に約300名の心拍を白熱球の明滅に変換させ、「メント・モリ」と作家が喩えるように、死すべき生命のはかなさと美しさを空間一帯に灯した。

2012年7月より、植物学者パトリック・ブランによる恒久展示作品《緑の橋》を含む光庭3にて、当館蔵の日比野克彦の《明後日朝顔21》の種を活用した「サンセット～サンライズ・アーク」光庭プロジェクトを始動させた。《緑の橋》を企画展出品作と位置づける事自体開館以来初、さらに所蔵品活用による所蔵作家同士の出会

い、コラボレーションも初の試みであった。朝顔の研究者たるブランが種を選択、レイアウトを考案。成長し、実を結んだ朝顔の種は時間・地域・記憶の込められた生命活動として多数の人々の手にわたり、広がっていった。蔓が枯れた後、日比野はに9×10メートルの和紙を現場で制作。仕上げに、蔓を全身に巻きつけ纏い、紙面上を歩き、蔓に流れてきた記憶を紙に移す行為を実行した。この《サンセット～サンライズ・アーク：NEWS PAPER TIMES》はこの場に宿った時と記憶を、会期終了まで日々表面に蓄積、更新していった。こうして、朝顔による風景は展覧会という時の流れを越えて展開した。

村上隆は本展のために《シーブリーズ アナザーディメンション 2012版》を新たに考案。全長約37メートルの壁面が蛍光のピンクと黄色、黒の壁画と化し、核爆発、殺戮、死を象徴する



6



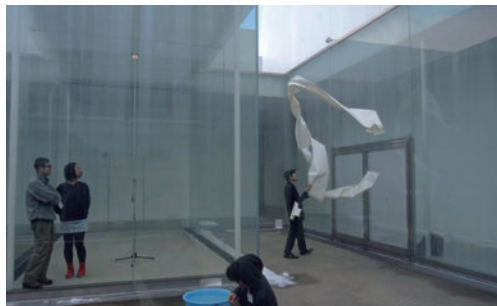
7



8



9



10

図柄が過剰な軽さと華麗さを以て多方向に展開し、原子力爆弾の投下という史実とその記憶の在り方を観る者に問いた。

气流、温度、湿度の影響で起こるエラー、予測不能な他者の行動も取り込み、枠組に収まることを徹底的に拒む梅田哲也の姿勢は、作品の完成、作者の存在、さらにはエゴの在り方をも問うものであった。

《bacteria sign (circle)》86点の展示に加え、鈴木ヒラクは、ミュージシャンの植野隆司を迎え、会場全域にて10時間のライブ・ドローイングを展開し、植野は新たな音楽を創出した。「描くことによってはじめて生まれてくる場や時間というものがある。同じ場所に戻ってきた時には違う時間が流れ、同じ時間には別の場所で何かが起こっている。」とは、本プログラムによせた鈴木ヒラクの言葉である。それは、本展の鑑賞体

験として観る者の内に起こっていたことであろう。このことは、本展企画中に他界したダヴィッド・ヴァイスがペーター・フィッシュリとともに制作した映像にて、ネズミとパンダが草花や構造物を触れて確かめる動作に象徴されるように観る者の心に培われていった。

2つの展覧会が、個々に自立しながら、会期が交差した時にひとつの壮大なテーマが露呈されるという仕組みは、開放的で導線がフレキシブルな当館の建築特徴に依拠する部分が大い。オープニングのアーティスト・トークでは、木村太陽、サイトウ・マコト、卯城竜太、田嶋悦子、秋山陽という、普段異なるフィールドで活動する作家達が一同に会したように、25組のアーティストの表現が多様に出会い、時空間の交差、コンセプトの変容とともに、鑑賞者それぞれの体験にもたらされた。

(北出智恵子)

1. 展示室3：ジェイク&ディノス・チャップマン
《ディノスとアドルフVII》2008年
 2. 展示室3：フランチェスコ・デ・ゴヤ
《「ロス・カプリチオス」62番 いったい誰が信じるだろうか!》
1797-1798年 大湊神社蔵
 3. 展示室3と4の間の空間：奈良美智
《Fountain of Life》(部分) 2001年
 4. 展示室1：Chim ↑ Pom
《SUPER RAT》2011年 ヴィデオ・スチル
 5. 光庭3横の空間：村上隆
《シープリーズ アナザーディメンション 2012版》
1992年(デジタルプリント:2012年)
 6. 展示室12：ペーター・フィッシュリ ダヴィッド・ヴァイス
《音と光—緑の光線》1990年
 7. 展示室12：草間彌生《朝のさざなみ》1975年
 8. 関連プログラム：ピピロティ・リスト
《ペバーミント》2009年
 9. 光庭3：「センセット〜サンライズ・アーク」
光庭プロジェクト 2012年
バトリック・ブラン「サンセット〜サンライズ・アーク」プラン
日比野克彦《「明後日朝顔プロジェクト21」の種》
 10. 梅田哲也
《みているをみられているはみられているをみている》
(2012年/ミクスト・メディア)の空間でライブ・ドロー
イング/パフォーマンスを行う鈴木ヒラクと植野隆司
(2013年1月26日)
- 4-7. 金沢21世紀美術館蔵
1. © the artist Courtesy White Cube
 3. © Yoshitomo Nara
 - 3.6.7.9. Photo: WATANABE Osamu
 4. © 2011 Chim ↑ Pom Courtesy of MUJIN-TO
Production, Tokyo
 5. © 1992/2012 Takashi Murakami / Kaikai Kiki Co.,
Ltd. All Rights Reserved. Photo: SUEMASA Mareo
 8. Film still Film by Pipilotti Rist; 80',
Starring Ewelina Guzik
© Pipilotti RIST Courtesy the artist and Hauser & Wirth
 10. Photo: IKEDA Hiraku